

多人数の心理学講義をどう進めるか

南山大学教職センター

宇田 光

要旨

多人数講義は、繰り返し取り上げられてきた問題である。しかし、少子化、ICT の急速な発達と普及、アクティブラーニングの必要性が叫ばれるなど、大学やその授業が直面する状況は変わってきている。また、多人数講義には弊害もあるが、多くの大学では無くせない実情もある。そこで本論ではあらためて、大学における多人数講義の意義や問題点について考察した。また、続いて筆者が実施した心理学講義を事例として、多人数講義を進めるにあたって採用可能な方法論を中心に検討した。

はじめに

大学の多人数講義は、古くからたびたび取り上げられてきた問題である。大学進学率が急上昇した 1960 年代～70 年代から、すでに社会問題化していた。しかし近年の大学を巡る環境は急速に変化している。たとえば文科省によると、大学の数自体が平成 13 年から 23 年の 10 年間で 111 校増加しており、その一方で短期大学は 172 校も減少している（なお、大学の学生数はこの間 346,840 名増加し、短大生は 348,509 名減少している）。また、少子化の進行など逆風の中で大学も改革を進めて、FD が活発に行われるようになった。学生による授業評価は、当たり前になっている。アクティブラーニングの必要性が叫ばれ、学生が主体的に学ぶ講義の在り方も問われ続けている。

他にも、ICT 等の技術的な発達もあって、大学やその授業が直面する状況は変わってきている。たとえば、1960 年代当時はなかった液晶プロジェクタ、パワーポイントなどを用いた情報提示が、現在の大学では普通に行われている。

一般に多人数講義は弊害も多いと思われる。しかし、多くの大学（とりわけ私立大学）では、一気に無くせない実情もある。筆者自身も本年度、これまでに経験したことのない程の多人数講義を担当した。そこで本論ではこれを機に、多人数講義について考察した。まず大学における多人数講義の意義や問題点について述べる。また、続いて筆者が実施した心理学講義を事例として、多人数講義を進めるにあたって採用可能な方法論を中心に検討する。汎用性の低い特殊なシステムに頼る実践ではないため、多人数講義を実施するうえで広く参考になると考えている。

1 多人数講義について

まず、多人数講義の定義や意義、問題点などをあらためて整理してみよう。

(1) 多人数講義の定義

多人数講義(授業)は大人数講義とよぶこともある。マスプロ教育という言葉もあるが、マスプロとは mass production(大量生産)の意味であり、研究上の術語としては不適切である。では、受講生数何名を超えると「多人数」となるのか、明確な線はない。多人数授業をどう運営するかに関する論考を集めた Stanley & Porter (2002)によれば、「100人以上」が多人数である、と定義する研究者がいる一方、50人以上だと多人数だと考える教員もいる。また、常時250人、500人という授業を担当している教員もいる、という。

Stanley & Porter (2002)は、400-500人の授業のことを「超大教室(a mega-class)」と呼んでいる。また L.G. Cleveland がテキサス大学で経営学を教えていた時、常時500名以上の学生をかかえていたと述べている。(2章「これは大教室ではない。町だ!」)米国の大学でも、多人数講義は存在していた(おそらく今日でも存在している)ことがわかる。ただ、米国の大学ではTAを配置することが一般的なので、教授の負担は比較的少ないと言えるだろう。

なお、近年ではMOOC(大規模公開オンライン講座)と呼ばれる仮想空間での大規模な講義の利用も広がっている。MOOCの受講生は何万人にもなりうる。授業はネットを通じてなされるので、それらの受講生は同じ場所に集まる必要はない。しかし本論の関心は、学生を教室という1か所に同じ時間に集めて行う伝統的な講義における多人数の問題である。現代のICTを活用したネット講義であるMOOCの問題は扱っていない。

(2) 多人数講義の意義と問題点

高校までの学校では、1クラスの人数に制約がある。法的に学級規模の基準が設けられており、それを越えた設定は不可能である。一方、大学の場合は講義の受講生数に関して、大学設置基準で明確に上限が決まっているわけではない。適切な方法で指導するよう、求められているだけである。

多人数講義は一人の教員が多数の学生を指導できるわけで、大学経営という観点からは合理的である。学生の立場からも、より安い授業料で教育を受けられる理屈である。実際、いわゆるエリート段階からマス段階にはいって以降の大学を、今日まで多人数講義が支えてきたとは言えるだろう。

しかし、大学は必ずしも積極的に授業を多人数にしようとしているわけでもない。むしろ、時間割の関係でそのような事態に陥ってしまう科目が一部にできてしまう場合もある。選択科目は必修科目と違い、学生が自由に選べるので実際に授業登録が進んでみないと人数がわからないのである。

一方、講義を多人数でおこなう問題点は、容易に多数列举できる。まず第一に、多人数となると何をやるにも時間がかかり、1回の授業で扱える内容が限られてくる。たとえば、ハンドアウトを全員に配ったり、レポートを回収するだけでもひどく時間を浪費してしまうのである。ちょっとしたグループワークをしたり、意見を集約したりする作業も、より困難である。

第二に、一人ひとりの受講生の参加機会が減少する。教員も学生の顔と名前が一致せず、

十分なコミュニケーションが図れない。さらに言えば、匿名化が進むことで私語が発生しやすく、受講生の集中度が低下する、さらに私語が広まる、という悪循環が始まってしまいう。「授業崩壊」という状態に陥る危険性も秘めているのである。

第三に、同時に多数の学生を指導する教員の負担が大きいことが挙げられる。日常のレポートや試験の採点などは、人数が増えるにつれて膨大な時間を要するようになる。

神戸学院大学の植村（2015）は、「大人数講義の問題点と課題」として、次の4つを挙げている。「①騒がしい教室、②見えにくい黒板・スクリーン、③一方通行型講義、④大量の提出物の処理」である。そのうえで、神戸学院大学では双方向型の授業を推進するためのシステムを構築していると言う。

以上のように、大人数講義には問題点が多い。一見すると効率的なやり方ではあるが、その実ひどい非効率と混沌に陥る危険性も含んでいる。しかし、多くの大学の実態としては避けられない現状がある。

（3） 教員と組織の対処

大人数講義において、教員はどのように対処しているのか。古いものだが、教員対象で「大人数授業」にテーマを絞っておこなった調査研究がある。1994・95年度に受講生100人以上の授業を担当した文教大学・文教女子短期大学部の専任教員並びに非常勤教員が対象の調査である（山本ら、1996）。

このうち、授業実践で重視する事項として最も高いのが「授業内容の準備」であった。次いで「話し方の明瞭さ」、「内容や資料の提示」、「学生の表情や反応」である。

また、授業展開上で重視している工夫では、最も高いのが「学生の興味関心を引きつける工夫」であった。次いで、「重要事項や要点の確認の工夫」、「授業開始時の工夫」である。授業目的で「学問対象の概念や現象に興味を抱かせる」がもっとも重視されていたが、これを実現しようとする工夫や努力が払われていることが示された。「重要事項や要点の確認の工夫」も高いことから、ただ一方的に教えるのではなく、学生に理解させようとしている様子がうかがえると言う。

成績評価の方法としては、「学期末テスト」が最も多かった。次いで、「出席点」、「学期末レポート」である。出席の取り方は、「個別の出席カード」が最も多かった。私語については、半数以上の回答者が「私語が気になる」としており、教員は何度も教室で注意している。特に教養科目で問題が大きいと言う。

さて、こうした大人数になってしまった場合、教員の努力や工夫にも限界がある。大学の制度上、何らかの合理的な対処ができないだろうか。他大学の様子を調べてみると、多数（たとえば200名）になった場合にTA（指導助手）がつくなどの制度を持っている大学は少ない。

追手門学院大学教育研究所（2006）では、全国の大学を対象として、大人数授業の状況やその対処方法を調査した^{※注1}。この結果、「受講生の多いクラスを担当している教員に対して、何か特別の援助をしていますか」という問いに対して、していると回答したのは、33校（28%）に過ぎなかった。「貴大学では、1つの科目につき、この人数を上回るとク

ラスを増設するという受講生定員の上限を決めていますか」という問いにも、「決めている」は 19 校、16%である。10 年以上前の調査なので、現在はもっと改善されていると思いたいが、どうだろう。

(4) 超巨大授業の事例

多人数講義の実践資料を探していると、なんと 800 名以上でおこなった授業の例がみつかった。その概要を紹介する。

沖 (2012) は 2009 年、立命館大学の教養授業で、878 名の登録する授業を担当したという。事務手続きのミスで、事前登録の上限 400 名が設定されていなかったため、この数になった。4 名の TA らとともに「現代の教育」授業に挑む。TA らとは、事前・事後にうちあわせをおこなった。教室には千脚の椅子が準備されていたが、びっしりの状態。

- ・ステージからは、後ろに座る学生の顔をまったく判別できない。
- ・教室前方には巨大なスクリーンが 3 枚、両側に計 12 台のプラズマディスプレイ。
- ・第 1 回、全員が着席するのに 20 分かかった。

補助者は、TA (教職の大学院生) 4 名、ES (Educational Supporter : 前回著者の授業をとった学生の授業支援スタッフ) を 2 名配置してもらっている。

毎回、授業の最後に時間を取って小レポートを書かせる。

- ・執筆中、TA/ES は腕章をつけ、机間指導する。(質問にも答える)
- ・レポートは書けた学生から出して退出する。受け取りは、TA/ES 計 6 名があたった。この間、教員は質問への対応をする。4 名の TA に翌週までに仮採点をしてもらい(それでも一人 200 枚になる)、一人につき 3 枚程度、優秀レポートを選ばせた。

- ・以上で、全体を通して静粛かつ集中した授業をおこなうことができた。
- ・毎回の小レポートの採点に 6 時間以上を要した。最終のレポートは 5000 字程度の論述で、1 日 8 時間、丸 10 日間を採点に要した。

以上の、沖の実践における工夫や努力はみごとなものである。また、多人数での授業がいかにより多様な労力や工夫を要するかがよく理解できる。しかし組織として、本来はこのような多人数講義に陥る事態を事前に避け、あるいはそうなった場合の対策を準備しておくべきであろう。

2 心理学 A4 の授業

以上、多人数講義の意義や問題点、具体的な対処などを見てきた。次にここでは、筆者がおこなった共通教育における心理学の多人数講義について、事前の準備、当日の手順、成績の処理など順次述べていく。

南山大学では、2017 年 4 月から学期制度が変更になった。従来の 2 学期制度から、全学一斉で 4 学期制、つまり「クォーター制度」※注²に移行したのである。週に 2 回ずつ同じ講義を担当して、8 週間 15 回の授業と期末テストで 1 学期が終わる。

(1) 授業の概要

南山大学におけるクォーター制度は、教員側も学生側も初めて経験する学期制であり、初年度は手探りである。ふたを開けてみると、科目によっては受講生数が極端に多くなってしまった。筆者は今年度の第二クォーター（Q2：6月～7月）で、共通教育科目の心理学A^{※注3}を担当した。この「心理学A4」（火・金1限）も多人数となった科目の一つであり、4月当初、履修登録者数が400名を越えていた。従来、多くても250名止まりだったので、異例の多さである。その後、履修を中止する学生もあって、349名で落ちついた。それにしても何しろ未経験の数なので、ハンドアウトの配布、レポートの提出と返却などを含め、授業の運営上の困難が予想された。なお、同じ第二クォーターでは心理学Bでも、400名を越える授業が一つ出た。

こうした多数の受講生になった場合の制度上の備えが心細いことは、既に指摘した。本学の場合も他の多くの大学と同様で、制度としては特に何も準備されていないことがわかった。つまり登録者数が何百人になった場合でもTAはつかない。通常の事務的な授業サポート（事前に依頼してハンドアウトを印刷してもらう、情報機器を整備してもらう等）を越えるものは何もない。

そこで覚悟を決めて、むしろ多人数授業への対処法を学ぶ機会だと考えることにした。数々の工夫を重ねて、なんとか乗り切った。以下はその記録である。

ちなみに、TAという制度はもともと、教育の重視から生まれたものではなく、反対に研究の重視から生まれたものだという（荻谷、1992）。研究を重視する（教授の研究時間を確保する）ために、大学院生を教育に使うことからTA制度が生まれたとの指摘である。

(2) 授業の開始までにおこなった準備

幸い、心理学A4は第2クォーターの科目なので、4月に事態が発覚してから5月にかけて、十分な準備期間があった。この間に、1) 教室の下見、2) ハンドアウトの準備について事務との打ち合わせ、3) 教科書の確保、4) 心理学担当者間での協議など、準備を進めた。



G30 教室

1) 教室の下見

古いが 600 名入る部屋（G30 教室）が一つだけあり、心理学 A4 はそこでおこなわれた。他の選択肢はなかった。一昔前と比べて、現在は学生が真面目でよく授業に出席する。「学生が全員授業に出てくるとはないだろう」と 300 名が登録されている授業を 200 名収容の教室で行う、などという方法は、もはや通用しない。

この規模の授業になると、視聴覚機器がどの程度使えるかなど、教室の機能も大切なポイントである。そこで、授業開始の数週間前に下見をおこなった。G30 教室は、座席が固定の長机で 5 列、階段状になっている。前方には大きなステージもあって、教室というよりも「講堂」である。視聴覚機器はマイク機器のほか、液晶プロジェクタ、150 インチのスクリーン、DVD プレーヤーなどがある。試しに PC を持参してつなげてみると、うまく機能していない。情報教育センターの職員に連絡して、修理してもらった。

こうして、パワーポイントや DVD 映像などは、一通り利用可能となった。ただ、古い教室なので、モニター機器や暗幕が一部壊れている、HDMI ケーブルでの接続はできない、など少々問題や不満は残った。

通常用いる入り口は後方に 2 か所（ドアは 4 つ）あり、他にも非常口が多数ある。ただし、Q2 の期間は改装工事が始まっていて、一部が閉鎖されていた。もともと 600 名収容で設計されているので、300 名の出入りにはさほど問題を感じなかった。

2) ハンドアウト

本学には、教材配布、グループでの討論、レポート回収などを Web 上でおこなう Web Class というシステムがある。大学の Web 上に教員が授業資料をアップしておく、受講生は各自で事前に印刷してることができる。ただ、今回はその方法は用いず、こちらでハンドアウトを準備した。後述の BRD（当日ブリーフレポート方式）を用いることにしたため、毎回 1 枚のレポート書式（資料参照）が確実に準備されることが、授業運営上に不可欠だったからである。

事前に事務原稿を持参して印刷を依頼しておく、当日の授業前に教室入り口のロビーに置いてもらえる。通常は、BRD の書式を 1 枚と、別にパワーポイントのスライド抜粋の資料を 1 枚、合計 2 枚であった。そして、教室に入る際に資料を取っていくよう、初回に受講生に指示した。やってみると、資料配付の時間も手間もかからず、意外にストレスなくうまくいく（ただし、授業途中の適切なタイミングで課題を配布したいと思う場合もあった）。

授業開始後、10 分ほど経過した時点で、ロビーから残ったハンドアウトを引き上げ、教室の最前列に持ってくる。遅刻者に不便を強いる意図である。ただ、実際にはたいした効果はない。むしろ、「遅れてくる友だちのために」と余分に持って行く人が出るので、数が足りなくなったりもする。

3) 教科書の確保

教科書は2冊指定した。①は、他の心理学の授業とも共通のものである。②は個別課題用であった。①は、浦上昌則ほか（編著）『心理学 Introduction to Psychology』（第二版）、②は宮沢秀次他（編）『調査実験 自分でできる心理学』で共にナカニシヤ出版。

200 名程度の受講を想定して書店に発注していたため、教科書が不足するおそれがあった。そこで、4月早々にその書店に連絡して対応可能かを確かめた。クォーター制度になり、教科書も従来とは違い、4月と6月の2回に分けて販売してもらう形になっている。幸いにして、準備期間があったためか、教科書が不足する事態には至らなかった。

4) 心理学担当者間での協議

筆者は他の心理学担当者（筆者を含めると専任は4名）と連絡を取り、善後策を話し合った。名古屋キャンパスで過去になされた心理学の講義の状況については、筆者は春の時点で不案内だった。他の担当者によれば今回、心理学の受講者がこれほどの多数となったのは、特異な事態のように思われた。話し合った結果、受講生数の上限を設けるよう教務委員会に対して連名で依頼文書を出すことにした。具体策の一つとして、履修登録の段階で受講生数の上限を設定しておく方法がある。しかし上限を決めてしまうと、結局授業コマ数を増やすしかなく、教員の負担が逆に増える可能性もあって、なかなか難しい。

(3) 授業の進め方

通常、筆者は授業開始時刻の5分から10分程度前に教室に入り、機器等の準備をする。この心理学A4に限っては、余裕を持って、20分～30分ほど前に入室した。何しろ、すべての準備を一人でやらねばならないうえ、質問などの個別対応も人数が多いために時間がかかる。たまたま1限目の科目であったので可能な対応だった。なお、通常の授業間の休憩時間は15分である。前の授業が延長したりすると、特に多人数の教室は入退場で非常に混雑する。あまり話題にはならないが、こうした状況の潜在的危険性を考慮すべきである。安全性確保は、受講生数の制限をする一つの有力な論拠となる。

授業の内容や進め方は、昨年までの同授業と基本的にはさほど変わっていない。授業の進め方や留意事項については、第1回で配布したシラバスに詳細に記載した。ただ、今回は毎回の授業開始5分ほど前からパワーポイントを使って、留意事項をPRするスライドを自動上映した。

座席指定はしない代わりに、着席する「ブロック」の指定のみおこなった。提出物・返却物の管理の便宜上、「右1列」、「中央」、「上段左列」などと教室を8ブロックに分けて、原則として、毎回同じブロック内に着席してもらう。授業が始まってみると、上段は人気があり、常にほぼ満席状態であった。一方、最前列から3列程度は空席が多く、要するに教室の後方に偏った状態が続いた。

授業は主にBRD（当日ブリーフレポート方式、宇田、2005）で実施する。BRDを採用した場合、講師は授業の冒頭で当日のレポートテーマ（原則として2つ）を発表し、それから15分程度の構想時間を設ける。この間、学生は教科書等を参照してレポートの構想を

練る（この時間帯では Web の検索はしないよう指導した）。その後教員による説明やビデオ視聴等があり、最後にまた 15 分程度の時間を取って 1 枚のレポートを執筆する。

このような手順を取ることで、当日の到達目標が明確になり、授業への集中度が上昇し、結果的に静粛な環境で講義を進めることが可能になる。BRD で進めた回には、人数が多くても、課題への集中度が高いので、私語の問題は全くなかった。一方、BRD を用いなかった終盤（特にポートフォリオ提出後）の回では、集中度の低下と私語が見られた。

ただ、毎回のレポート提出・返却を求める方法は、忙しくなりすぎる。クォーター制では、数日後に次回の授業がくる。そこで、最初の 5 回ほどの授業では全員分を回収したが、その後は抜き打ち的にいくつかの列を指定して、一部の受講生の分（3 分の 1 程度）だけを回収するかたちを取った。一部だけでも読んでおくと、次回の授業でコメントをすることが可能になる。

なお、（４）で触れる通り、後日レポート集のかたちで再度提出する機会がある。そのため当日提出するか否かにかかわらず、レポートは毎回しっかり書いておく必要がある。

一般に大学の講義は、学生の集中度を考えて 10～15 分ごとに分割して進めることが推奨されている（Davis、2001）。そのことも考慮し、各回の時間配分は典型的には次の図 1 のようにモジュール化した。教員からの「説明」部分の上限は、1 回あたり原則として 20 分以内としている。ひとつの区切りが 20 分でも長すぎるほどである。

レポートの提出が完了するのに 5 分はかかるので、遅くとも授業終了 5 分前には提出を開始できるようにした。回収したレポートは、署名して次回に返却した。明らかに分量不足、不備がある場合のみ、書式の所定欄（分量不足、文字・文章、読めない、など）にチェック☑した。この際に毎回 1 枚 1 枚を丁寧に読むのが理想的ではあるが、今回は断念して、簡略な形で割り切ることとした。

| | | |
|--------------|-----|-----|
| BRDの事前、構想時間 | ・・・ | 15分 |
| パワーポイントでの説明 | ・・・ | 20分 |
| 教材DVDの上映 | ・・・ | 20分 |
| 課題（テキスト②を利用） | ・・・ | 15分 |
| BRDの事後、執筆時間 | ・・・ | 15分 |

図 1 授業の各モジュール時間配分例

今回の授業では、出欠の確認をおこなわなかった。出席票などの紙を使うと、時間も手間もかかるし、本学では IC 式の学生証^{※注4}は用いていない。その代わりに、BRD 方式では当日レポートの回収枚数を数えることで、出席状況が把握できる。また、当日の出席者数は、ハンドアウトの残り枚数からも推定できる。こうして、毎回の受講生数はほぼ 300 名前後であると把握できた。ポートフォリオ提出後の 3 回（第 13 回～15 回）はかなり減り、250 名程度の場合もあった。質問は、授業の前後や机間指導の際に受け付けた。

(4) 提出物・返却物



レポートのファイル

レポートなどは8つのブロックごとにまとめて回収・返却する。レポート提出時は教壇上に「右1列」「中央列」などのブロック名を書いた看板を並べておく。初回、各自で自由に提出させてみると、前方で混雑して5分以上かかってしまうことがわかった。そこで、次からは、近隣の数名分まとめて代表に出してもらうことで、混雑の緩和を図った。また、授業の最後、「レポート執筆」の時間帯（15分）に前回のレポートを返却する。この際には前回のレポートを、色分けしたクリアファイルに入れてブロック内で回し、自分のものを取ってもらった。レポート書式の端には、「学生番号の最終桁」という欄（資料参照）がつくっており、そこに印をつけておくことで、自分のレポート発見が容易になっている。

経験上、クリアファイル内の枚数が50-60枚程度までであれば、10分程度で全員が、自分のものを探し出すことができる。受講者が300名いても、8つに分ければ、各ファイルは多くても50枚程度になり、混乱が防げる。残った分、つまり欠席者分や、他のブロックに着席した人の分は、まとめて最前列の決まった場所に置いた。

学期末にはあらためて、ポートフォリオ（レポート集）を回収する。毎回の出欠確認はおこなわない代わりに、このポートフォリオで授業に参加しているか否かを判断した。

（実際には、一人10枚以上のレポートを書いている。今回は特別に、各自で厳選して当日レポートの中から5枚を提出するように指示した。）第12回の授業（7月18日）に、学年・学部別に分けて回収した。欠席などで当日出せない学生もいるため、第13回でも残りを回収して直ちに採点した。翌週の14・15回で返却し、期末テスト当日には各自持参させる。

一人5枚でも、表紙を入れて6枚、全員分で2000枚以上になる。重いので、回収・返却の当日は、台車を準備して臨むことになった。各学年、学部を表示した看板を教壇上に設置して、ファイルに分別し、番号順に並べ替えて、と結構手間がかかる。実際、教員一人

でやるのは無謀ともいえるレベルであって、もっと人手が必要である。

返却時も、学年・学部を表示したトレーやクリアファイルに入れて前から回したが、うまく流れない列があったりして混乱した。

(5) 期末テスト

学期末テストは、初めてマークセンス方式でおこなった。多肢選択方式での出題だから、多数の問題作成が必要となる。このため、通常よりもテスト問題の完成までには時間がかかった。試験当日は教員が協力して監督を分担し、複数の教室に分かれて実施する（この方式だと、何百名の受講生がいる授業でも試験が無理なく実施できる。ただ、出題者も一室の監督を担当するので、問題について質問が出た時の対応が難しい。）

採点の段階になると、機械がマークシートを高速処理してくれて簡単である。受験者数は 323 名（当初履修者数の 86.5%）である。採点には、情報センターに事前にアポを取っておく。当日は、教員立ち会いで係員がマークシートの採点処理をおこなう、という手順になっている。作業自体は 15 分程度で終了する。

本科目の成績は、レポートで 50%、期末テストで 50%という配点になっている。2つの得点を単純加算して、A+、A、B、C、F で評定する作業になった。これも、350 名もの受講生があると事前にわかっていたら、レポート集のみで 100%と、単純にするところであった。

3 おわりに

100 人を超えるような多人数講義は、古くから数多くの矛盾を抱えながらも続けられてきた。しかし、現状でも避けられないのが多くの大学の実情である。しかもそれに対して、TA をつけるなどの制度的・組織的なサポートは極めて弱い。

今回、初めて 349 名という多数の受講生が登録する「心理学」の授業をおこなった。そして、なんとか工夫をしながら無事に 15 回の講義と期末試験を終えることができた。

まとめると、次のような方法を採用して、多人数に対応した。

- ・BRD(当日ブリーフレポート方式)を用いてモジュール化した授業
- ・座席のブロック指定制
- ・パワーポイントや教材ビデオなどを用いた情報提示
- ・ポートフォリオとマーク式の期末テストによる成績評価

今年度、こうした事態は想定していなかったもので、残念ながら以前の同じ科目の満足度などの対照データが無い。そこで、客観的に見て今回の多人数講義が従来の講義と比べて良かったのか悪かったのか不明である。ただ授業者の見た限り、以前の 100 名～150 名程度で行った講義と集中度などで大差はなかった。

こうした多人数授業で、ポイントとなるのは、①授業をアクティブに進める工夫、とりわけ個人が取り組む明確な課題を設定すること、②ハンドアウトやレポートなど紙類の合

理的な扱いの工夫である。①については BRD 方式を採用したこと、パワーポイントや各種の DVD 教材による視聴覚的な情報、ペアワーク、などがうまく機能したと言える。特に BRD 方式は、個人の課題達成を 90 分で求めるので、集中度を高めるには極めて有効な手法である。

また、ポイントの②については、うまく回収、返却をする工夫をしないと、それだけで混乱してひどく時間がかかり、受講者の集中を損なう。今回は座席のブロック指定制を採用して、大きな混乱無く進めることができた。

いずれにせよ、大人数講義においてこれらの仕事を教員が一人でこなすのは、やはり大変である。登録の上限を制限するか、大人数でやる場合には TA を必ずつけるなど、大学が組織としてサポート体制を整備する必要がある。

注

※1 2005 年に大人数授業の状況やその対処方法を調査。対象は約 5000 人以上の私立大学 69 校、国立大学 44 校、公立大学 4 校、計 158 校。回答は 120 校から。回収率 73%。

※2 月・木とか火・金曜日の同じ時限に同じ授業がはいる時間割となる。水曜日のみは、1・2 限連続で開講する。

なお、同時にキャンパス統合も行われた。従来は名古屋市と瀬戸市の 2 か所にあったキャンパスが、名古屋キャンパスにまとまったのである。筆者自身は瀬戸キャンパスに所属していたため、研究室の引っ越しを 3 月におこない、4 月から新しいキャンパスでの授業を担当することになった。

※3 心理学は A と B があり、さらにそれぞれ A は 1 から 5、B は 1 と 2 の合計 7 クラスが開講されている。別々の教員が担当しており、その 1 つは非常勤講師である。

※4 IC 方式の学生証を教室前の機械にかざす方式で、出席確認を行う事例がある。ただ、こうした一見合理的で確実な方法にも落とし穴がある。学生証の貸し借りによる不正がおこなわれるなど、問題が報告されているのである。

文献

Davis B.G. 2001 Tools for Teaching. San Francisco: Jossey-Bass.

荻谷剛彦 1992 アメリカの大学・ニッポンの大学 ―TA・シラバス・授業評価 玉川大学出版部

沖 裕貴 2012 「超巨大授業に挑む ―受講者 900 名の教養授業における挑戦」(小田隆治・杉原真晃 学生主体型授業の冒険 2 予測困難な時代に挑む大学教育 ナカニシヤ出版 p55-72.)

追手門学院大学教育研究所編 2006 大人数授業をどう改革するか アスカ文化出版
Stanley, C.A. & Porter, M.E. (Eds.) 2002 Engaging Large Classes: Strategies and Techniques for College Faculty. Anker Publishing Co, Bolton, Massachusetts.

宇田 光 2005 大学講義の改革ーBRD（当日レポート方式）の提案 北大路書房
植村仁・佐野光彦・中川万喜子・中西久雄 2015 大人数講義科目における双方向実現
の可能性を探る 神戸学院大学教育開発センタージャナル 6, 15-25.

<https://www.google.co.jp/>

山本卓・秋山胖・大橋ゆか子・小林勝法・寺澤浩樹・平澤茂・村野宣男・綿井雅康
1996 大人数授業に関する質問紙調査について 『教育研究所紀要第5号』文教大学付属
教育研究所（文教大学教育研究所研究部）

http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/old_web/watai/report.html

資料 BRD L3 書式

学生番号の最終桁・・・ 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

座席 . . . 前段 左 1、左 2、中央、右 1、右 2 列 上段 左、中央、右列

当日プリーフ・レポート

返却後も保存すること

テーマ【 】

フリカ・ナ

年

学生番号 _____ 名前 _____

[illegible]

本日の内容 31字要約 ニックネーム ()

The diagram shows a rectangular block of width 10 and height 2. A horizontal arrow points to the left face. The block is divided into 10 vertical sections by dashed lines. A shaded rectangular region is located at the bottom right, spanning the last 4 sections and the bottom 2 units of height.

(文献/友人からの修正指示/感想)

番式 BRD-L3 b - UDA

修正指示 ☐ 現時点ではこのレポートは不合格です。期末までに修正しておくこと。

(分量の不足＝要加筆 文字・文章の修正 テーマ逸脱 事実誤認 論理性 形式の違反 コピペ
・文献を明示 読めない サービス精神欠如 その他)